

## 法然仏教学研究センター 2024年度全体研究会

〈第1回〉

日 時：2024年5月24日（金）

参加者：18名

・研究発表

発表者：春本龍彬（当センター嘱託研究員・大正大学総合仏教研究所主任）

テーマ：『選択集』について—その変遷と諸本研究の展望—

要 旨：本発表ではどの本に基づいて『選択集』を見ていく必要があるか確認し、その上で『選択集』はどのように変遷していったか、そして『選択集』諸本研究の展望はどのようなものになるか述べた。すでに拙著『選択集の成立と展開—廬山寺本を中心に—』（法蔵館、2024）でも論じた通り、『選択集』は形作られ、撰述される中で内容が変化していき、またそれとともに複製もされていったと考えられる。今後の『選択集』諸本研究は、明らかに異同が認められる特殊な箇所注目しつつ、「廬山寺本」とそれ以外の本との関係を突き詰めていくような議論が不可欠になるであろう。ただし、どのような異同に焦点をあてて『選択集』諸本の全体像を捉えていくべきなのかという点に関しては、慎重な姿勢が求められると思われる。引き続き『選択集』を多角的に考察していきたい。

・各班進捗状況発表

〈第2回〉

日 時：2024年6月28日（金）

参加者：16名

・研究発表

発表者：青木篤史（当センター嘱託研究員・浄土宗総合研究所研究員）

テーマ：関東十八檀林における僧侶養成について

要 旨：江戸時代、僧侶になろうとする者は関東に一八ヶ寺あった「関東十八檀林」での修学が必須条件であった。檀林に入寺した所化はそれぞれの檀林寺院で二〇数年にも及ぶ修学を積み、元祖法然上人より相承される伝法を相承され、一僧侶として全国に散っていったのである。

その中でも檀林寺院における特徴的な修学方法として「九部宗学」があ

る。1期3年を基本として、第7祖聖岡上人の著作より勉強をはじめ、その次に元祖法然上人、そして善導大師の『観経疏』、最後に世親の『往生論』を学んでいた。そのような長年にわたる修学の中で、それぞれ伝法を相承され退山していったのである。その背景には、幕府の存在が欠かせないものであり、所化は幕府からの様々な法度の下で修学を積んでいたのである。本発表では、そのような修学の概要や幕府からの法度について触れ、時代が下るにつれてどのように変化していったのかについて論じた。

- ・各班進捗状況発表

#### 〈第3回〉

日 時：2024年9月27日（金）

参加者：21名

- ・研究発表

発表者：田中実マルコス（当センター嘱託研究員・本学非常勤講師）

テーマ：黄檗禅獨湛の浄土教・各班進捗状況発表

- ・各班進捗状況発表

#### 〈第4回〉

日 時：2024年10月25日（金）

参加者：15名

- ・研究発表

発表者：崔 鵬偉（当センター嘱託研究員・龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員）

テーマ：『心性罪福因縁集』をめぐる諸問題

要 旨：『心性罪福因縁集』は中国の禅僧永明延寿（904～975）に仮託され、平安後期頃、日本で成立した仏教説話集である。永観（1033～1111）『往生拾因』第九因のほか、伝源信（942～1017）『菩提集』や『今昔物語集』天竺部などに受容されていることから、平安後期の浄土思想や、天台本覚思想、また説話文学の研究において注目されてきた。しかし、『心性罪福因縁集』に取り組んだ本格的な研究はなく、その成書環境や思想内容については、未だ解明できていないところが多い。

本発表では、まず諸経録にみる『心性罪福因縁集』の記載、および現存伝本の系統を検証しつつ、現在の研究状況や課題を紹介した。ついで、中巻第八・十・十三話を具体例として、これらの話はどのような資料に基づき、どのように作られたのかについて考察した。特に日中文化交流の視座から、『心性罪福因縁集』における五代から北宋にかけての仏書や信仰の受容の一端を浮かび上がらせた。

・各班進捗状況発表

〈第5回〉

日時：2025年1月24日（金）

参加者：13名

・研究発表

発表者：小川 法道（当センター嘱託研究員・知恩院浄土学研究所研究助手）

テーマ：道綽『安楽集』における浄影寺慧遠の影響

要旨：道綽禅師（562-645）の『安楽集』は、浄影寺慧遠（523-592）の『観経義疏』を批判したことで有名である。特に仏身仏土の理解をめぐって、道綽は慧遠が阿弥陀仏と極楽浄土を応身応土とする主張を批判し、報身報土論を展開していることは周知の通りである。その後、中国では、慧遠の『観経義疏』は注目されることになるが、『大経義疏』に関しては、あまり注目されないでいる。

批判とは反対に、道綽は慧遠の影響を受けていると言われている。そこで道綽がどこからどこまで慧遠の影響を受けた箇所であるかを、共通性という点から体系的にまとめた。そしてその共通点は、『大経義疏』から二箇所、『観経義疏』から三箇所、確認でき、道綽が著者の名前を出さずに慧遠の『大経義疏』を引用することから、隋唐時代においても、慧遠の『大経義疏』が流通していたことを明らかにした。

・各班進捗状況発表

以上